

「研究の窓」(9)

ある訳本との出会い

池端 忠司

神奈川県法学部に赴任し、4ヶ月近くになり、廊下や階段を間違えずにやっと自分の研究室にたどりつけるようになりました。また、行きたい場所に合わせて、降りる階を選ぶことも学び、プールを研究室が取り囲む研究棟の機能性にしだいに追いつけてきたようです。15年間、リゾート地のような地方都市で大学教員をし、環境の変化にすぐには順応できない年齢となって、都会と地方との生活様式の違いを実感しています。今から思えば、やはり、前任校のあった四国の高松はゆっくりと時間が流れていたのだと思います。この4月からのJR大船駅から東白楽駅までの満員電車の経験や、列を作り入場しなければならない都会の映画館での孤独の経験が、研究により影響があることを期待しています。

さて、本論に入り、表現の自由を研究する過程で出会った一冊の本を取り上げ、このニュースレターでの自己紹介に代えたいと思います。

表現の自由の原理論という分野で欠かせない人物に、19世紀に活躍したジョン・スチュワート・ミルがいます。その著書の『自由論 (On Liberty)』(1859年)は、自由のもつ価値や限界を考えるうえで、今でもよく言及されます。そして、それと同じだけ重要な文献だと思うのですが、今日の日本ではあまり読まれない、当時ミルの自由論を徹底的に批判した本で、英米の文献ではよく言及される本に、ジェームズ・フィッツジェームズ・ステイーヴンの『自由、平等、博愛 (Liberty, Equality, Fraternity)』(1873年)があります。

私は、前任校の付属図書館でこの原本を探しているときに、たまたまその邦訳書を見つけ、少々、感動しました。というのも、その訳書は、明治の初め

の自由民権運動期にミルの自由論が翻訳され、よく読まれていたのとはほぼ同時期に、翻訳されていたからです。

自由民権運動の盛り上がりは、その深さという点でも、ほんものであり、自由があまり有り難いとは思わなくなった現代人と当時の人の感覚が大きく違っていた

のではないかと感じました。その本は、スチーベン著『自由平等論 上巻』です。長野県士族という肩書きのある小林営智という人物が訳し、東京の自由出版会社という出版社から、1882年(明治15年)に出版されています。残念ながら、上巻だけで、上巻は原本の最後の方の「博愛」からの章の訳はなく、下巻は出版されていないようです。

ナクシス・ウェブキャットで検索すると、上巻だけが、筑波大学、東北大学、九州大学、京都大学の4大学に所蔵されていました。また、小林営智という人物がどのような人か、その訳本からでは分ならず、分かっているのは、そのほかに、1883年(明治16年)の伊曼(George Helm Yeaman)著の『政治汎論(Study of Government)』(東京：日本出版)、1884年(明治17年)の『万国兵制』(東京：博聞社)、1885年(明治18年)の『独逸国勢誌』(東京：博聞社)を相継いで書いていたことだけです。これらの本に当たり、もう少し調べてみようと思います。

(法学部 教授)

